

学校関係者評価委員会資料(R4・3・22)

評価(A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった)

◎「遊びこめる子」を育てる。		評価	委員会評価	コメント
(1) 個々の育ちや興味に応じた環境について学び実践に生かす。				
年長	<ul style="list-style-type: none"> 日々の記録を書く時に子どもの環境へのかかわり方や、道具や素材の扱い方、次の関りや環境構成等も書くことを意識する。 日々の記録をもとに、学年会でエピソードを掘り下げて話をし、教材の出し方、環境について相談し保育に生かしていく。 長期休みには教材研究に取り組んでいく。(学年の先生で、1つの素材を使って製作をし素材の使い方扱い方を知る機会を増やす。) 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 記録の中に、保育者のかかわり、そのかかわりが子どもの遊びにどんなことをもたらしたのかを書き込んでいくことで、子どもの体験していることや学んでいることが見えてくるようになった。物的環境の配置、量、遊びに合わせて出すタイミングなど意識することができたが、物的環境だけでなく、そこにかかわる教師や友達の存在などの人的環境についても併せて丁寧に考えていく大切さが分かった。 自分の保育を振り返る材料としても記録があり、次への保育につながっていくこともあらためて感じた。他の先生から見た時の違った見え方や自分だけでは気づけなかった学びを子どもがしていることに学年会で気づくこともあった。また、年少組の研究保育で「子どもの姿を週案のねらいに返していくことで、育ちが見えてくる」という大きな学びがあった。週案作成の意味や重要性を再認識したとともに、記録、週案をもとに学年会での話し合いの質を高めていけるようにしていきたいと感じた。 指導計画は発達の見通しをもてる重要なものであることを意識しつつ、今年の子もたちの実態と育ちとを考えながら、長期休みに就学に向けた教材研究に取り組むことができた。それを実際に保育の中で生かしていくには、自分のクラスの实態や個々の遊びに合わせ、子どもが自ら必要な物を選択し遊びに取り入れていけるような物の配置、場の構成、教師のかかわりを柔軟に変化させていくことが大切であると感じた。子どもが自ら育とうとする姿を支えていける保育ができるようになりたいと改めて感じた。
年中	<ul style="list-style-type: none"> 記録の取り方を工夫し、遊びの方向性を探りながら教材や素材の使い方や、環境の再構成のタイミングを考えていけるようにする。 学年会の中で、遊びの様子から次に必要な遊具や素材についても意識して話をするようにしていく。 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 記録を書く時に項目を意識することで、自身の保育の振り返りや子どもの育ちの整理に繋げやすかった。記録の大切さを実感しながらも、忙しさに追われると記録を書けないことが多かったり、書く量に個人差が出てしまった。かかわりの焦点を明確にするためにも、記録を書く時間の保障や書き方の工夫をしながら、日々記録をとれるようにしていきたい。 学年会や長期休みでは、その都度出ている遊びや環境、教材について話し合い、見直すことができた。色々な教師の考えを出し合うことで、新たな素材や環境を子どもに提案することができ、遊びの広がりや育ちにつながったと実感できた。環境や素材の準備の仕方、子どもの捉え方など、色々な教師の考えを聞くことで、自身の引き出しが増えて勉強になった。
年少	<ul style="list-style-type: none"> 学年会の中で見立て遊び、ごっこ遊びについての文献を読み合い、遊びの意味あいや捉え方について学ぶ。 身近な遊びのエピソードから、教師の援助や子どもたちの姿、何を学んでいるのか考えを出し合い、捉え方の幅を広げていく。 いろいろな先生との話し合いの中で、価値観や保育観を知る機会を増やしていく。 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ごっこ遊びの発達と、モノ、場、人とが相互に関連し合っていることに改めて気づくことができた。ごっこ遊びの中で、子どもたちが今していることを肯定的に受け入れながら、何を体験しているのか、どんなことが育ちつつある姿なのか等を捉えていくこと、また、一人一人の内面理解とともに必要な経験は何かをよく見極めながらかわっていくことの大切さがわかった。見立ての面白さやイメージする世界観を味わいながら、繰り返し夢中になって遊びこめるような環境を保障していくため、3歳児なりに自分で場づくりができる環境やなりきって遊べるような素材選び、遊びだけでなく、絵本や歌なども含めて生活全体と重ね合わせながら、遊びからの学びがうまれていくよう工夫を続けていきたい。先生たちとの様々な話し合いの機会は、いろいろな視点から子どもの姿を見つめていくことで自分が思っていたことと違う学びがあり、自ら振り返り学び得ようとする気持ちが大事であることを感じながら考え方を広げることができた。
(2) 一人ひとりの子どもの情緒の安定を目指した保育に努める。				
なかよし	子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、子どもの状態を把握していくことで情緒の安定を図っていく。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 安心して生活できる環境の保障と温かい雰囲気の中で、子どもたちの「楽しい」「やってみたい」を援助していくことでそれぞれの情緒の安定へつながっていったと思う。一斉の動きに合わせるだけでなく一人ひとりの気持ちを丁寧に受け止め、その子が今なにを求めているのかを探りながらかわっていくことが必要であることを改めて感じ、さまざまな対応が必要であることを学んだ。チームで保育していることの利点を活かしながらさらに一人ひとりの気持ちに寄り添った保育に努めていきたい。
とことこ	一人ひとりの子どもの気持ちを受容し、安心・安全に生活できるように援助していく。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 登園時の子どもの表情や様子を見て心の状態を把握し、不安定な子には情緒の安定を図るため根気強く対応した。子どもの言葉に表せない思いを探り、その思いに向き合い寄り添うことで満たされ、次第に安定し保育者を頼らず自ら好きな遊びを見つけて遊び出していた。 支援が必要な園児が入園してきたことで、子ども達は自分より年下の子のように可愛がったり、優しく話しかけたりする姿が見られた。一方で活動に関係なく自由に動きまわっている支援児を見て、自分ももっと遊んでいたいという思いから自由に動き回り、集団生活のリズムが崩れてしまう姿もあった。そうしたくなる気持ちも受け止め、「先生お部屋で待っているね。」等声をかけ、子どもが自ら気づき戻って来るのを待つようにしたが、対応の難しさを感じた。
(3) 研修・研究を積極的に取り組み、学んだ事を実践にいかす。				
幼稚園	子どもが遊びこめる要因について研究保育や事例研究から探る。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 「遊びこめる」とはどういう姿かを考えた時に、子どもが何かに没頭している姿や盛り上がっている遊びに目が行きがちになり、その遊びを支えていこうと一生懸命になってしまうことが多かったが、大事にしたいことはそこで一人一人の心の動きや育ち、遊びからの学びであることに園内研修で気づくことができた。子どもがやりたいことを見つけ、心ゆくまで楽しめるよう内面に思いを寄せながら、支えとなれる環境を今後も学んでいきたい。
なかよし	保育部での生活をポートフォリオ等で知らせていく。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ポートフォリオを作成していく中で保育者は子どもの遊びや生活について振り返りや読み取りの機会となった。保護者の方へなかよしルームでの生活の発信として一定の効果はあったが内容の精査など改善が必要な部分もある。
とことこ	子どもの思いを探るために、記録の取り方を工夫していく。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの面白い遊びや見立て遊び等を写真で撮りノートに記録し、保育者間で共有するようになってきた。それぞれの保育者が見た遊びの場面を「この遊具がこんなものに変化して遊び出していたよ」「この一言で遊びが変わったよ」等伝えあっていくことで、子どもがどんなイメージで何を楽しんでいるかを探り、次の環境を考える手がかりとなった。

◎未就園児親子教室の内容をリニューアルし、子育て支援の充実を図る。

	評価	委員会評価	コメント
(1) 親子にとって安心できる遊び場、遊び体験の場となるよう教室の内容の充実を図る。	A	A	・週1回の開催としたことで戸外でたっぷり遊ぶ時間を保障しながらも、季節ごとの遊びや製作、行事等も体験してもらうことができ活動内容については満足してもらうことができた。親同士の情報共有や、先生方から専門的視点でのお話を聞く時間を要望する保護者が多かったので来年度の課題として検討していきたい。
(2) 園の教育を理解していただき、幼稚園への入園につながるよう努める。	A	A	・教室への登録人数は前年度と大きく変わってはいないが、週1回の開催としたことで、子ども達が幼稚園に遊びに来るのを楽しみにしてくれるようになり、保護者も幼稚園に親しみをもってくれるようになった。子ども(保護者)との関係性を作っていくことが、園の教育の理解、入園への期待につながったと思う。

◎特別支援教育への理解を深め、園内の支援体制を整える。

	評価	委員会評価	コメント
(1) 支援を必要とする幼児の理解や保育の方針について職員で共通理解するよう努める。	B	B	・職員間で話し合いの時間をとることが難しく、個別の指導計画の作成も遅れ気味になってしまったが3学期の姿を入れて完成するところまでできている。指導計画を作成し皆で目を通すことは、時間がない中で学年とコーディネーターが情報を共有するツールとなる。指導計画はまだ迷いながらの作成である為、今後も専門性を高めていけるよう努力していきたい。
(2) 園内、関係機関、保護者との連携がスムーズに行えるよう園内の支援体制を整える。	A	A	・巡回指導、研修会についてはコーディネーターが窓口となり、計画や連絡等を行った。保護者面談、関係機関との連携は各担当が行い、その内容をまとめて(紙面)コーディネーターに報告するようにした。役割分担ができていた事で、一部に負担が偏ることなくスムーズに特別支援関係の業務を行うことができた。

<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年自己評価に関しては概ね妥当である。 ・大きな意見として、重点目標の項目の整理の必要性が挙げられました。年度に取り組みたい重点テーマを保育者から意見を吸い上げることは、学校評価の主体性という意味で大きな意味があると思います。 <ul style="list-style-type: none"> ①上位、中位、下位項目への整理 教育目標が上位とした場合、そのために今年度はどのような方向性に重点を置くのか(中位)、さらには具体的手立てをどう設定するのか(下位：最も具体)という順序を考えた場合、今回コメント欄に多く書かれている「記録」については「下位：最も具体」に位置するものと考えます。 ②下位項目で評価する。 ひとつ例として年長のコメント欄にある3項目は「記録」「話し合い」「教材研究」(「実践」というのもありでしょう。)に区分されて書かれているので、それを下位項目としそれぞれを PDCA で評価することにより、評価が明確になり保育改善に生かされると思います。 ・それと関連して(1)と(3)の内容が重複しているので、住み分けをするのか、融合させるのかといった検討が必要と思われます。
----------------------	---